

5. けいれん・ひきつけを起こしたとき



一般的にけいれんとは、意識がなくなり、手足を突っ張ったり、ガクガク震えたりするような状態です。

目を開いていて上を向き、歯を食いしばっていることが多いです。

高熱が出たときにけいれんを起こすことがあります。多くの場合、心配のない熱性けいれんですが、脳炎や髄膜炎などの重病のこともありますので、注意が必要です。

熱性けいれんは、熱が出始めて1日くらいの間に、熱が急激に上がるときにおきやすく、からだ全体で左右対称性に起こることが多いです。

看病のポイント

- ほとんどのけいれんは5分以内に自然に止まります。
あわてないで落ち着いてください。
- 時計を見て、けいれんが始まった時間を確認してください。
- 無理に口をこじ開けたり、ほほをたたいたりしないでください。
- 衣服を緩め、静かに寝かせましょう。
- 吐きそうであれば、吐いたものが喉につまらないように、
からだと顔を横に向けましょう。
- 意識が戻るまで、必ず付き添いましょう。

- けいれんが止まったら、時間を確認しましょう。
- けいれんが止まったら、汗をしっかり拭いて体温を計りましょう。
- けいれんが止まったあとは眠ってしまうことが多いです。意識があることを確認するためにも、からだを軽くゆすったり呼びかけたりしてください。
- けいれんのあと、普段と変わらなくても、翌日には念のためかかりつけ医を受診しましょう。

こんなときは、急病診療所などを受診しましょう

- 初めてのけいれんのとき。
- 生後6カ月未満のけいれんのとき。
- 意識のはっきりしないとき。
- 手足などの動きが変なとき。
- なんとなくいつもと違うとき。



こんなときは、救急車を呼びましょう

- けいれんが10分以上続くとき。
- けいれんが止まっても、すぐに繰り返すとき。
- けいれんが止まっても、意識がはっきりせず、呼びかけにも反応しないとき。
- 頭を打ったあとのけいれん。



注意しましょう

- けいれんを起こしているときに、無理に口の中になんかを入れてはいけません。空気の通り道が狭くなり反対に呼吸がしづらくなります。口の中が切れたり、口をこじ開けようとした道具や、歯がおれて、おれた歯が気管に詰まったりすることもあります。注意しましょう。
- 激しく泣いたあとに息が詰まった、足が突っ張った、ぐったりした、顔色が悪くなったなどの症状が出る場合があります。呼びかけや軽くからだをゆするとすぐに反応することがほとんどで、このような場合は“泣き入りひきつけ”と呼ばれるもので心配はいりません。
- 熱性けいれんは、予防のために座薬を使うことがあります。詳しくはかかりつけ医にご相談ください。
- いわゆる良性の熱性けいれんと呼ばれるものは、何度起こっても特に後遺症を残したりする心配はありません。

